

“ 罪を憎み、罪人を愛しなさい。”

ルカによる福音書 18 章 9 節～14 節

オープンドアで、またオンラインで参加されている皆さん今日は。私達は今、神様について私達がよく聞く事であって実際には神様が聖書の中で言われていない事についてのメッセージをシリーズとして学んでいるところです。私達が生活する上でよく言うことで、神様が言わないことが多くあります。例として、“ おっと(すまない) “ 、” ごめん。私のせいです。” とかです。

神様は間違いをされない方で、御自身の良い計画と意思に従って意図的に行動されると聖書は教えています。もし皆さんがこの事を本当に信じるなら、皆さんがご自身の鏡を使い、そこに映るしわ(皺)、髪の毛(髪の毛の不足、白髪とかなんでも)、顔の形などを見る、その見方に影響を及ぼすでしょう。神様は、“ ワオ、そう来るとは思わなかった。” とは決して言われません。私達は言うでしょうけど。神様は全てを御存知ですから。

“ 列に並んで。” “ 忙しいから、あとで話す。” “ あっちへ行ってくれ。” などは私達が聖書で出会う神様の言葉ではありません。聖書の神様は永遠の神であって、何時でも十分な時間を持ち、その驚くべき愛の中で神様の子供である私達に時間を使いたいと望まれているのです。

今日私はご一緒に、教会やその他の場所で聞いたことがある格言、“ 罪を憎み、罪人を愛しなさい。” (言葉使いは様々なバージョンがあります。)について見ていきたいと思っています。

聞かれたことがあるでしょうか？ 私は聞いたことがあるし、これと同じようなことを含めて以前言ったことがあります。多分、クリスチャンはよく言っていると思います。何故なら、聖書のローマ人への手紙 12 章 9 節で、“ 愛には偽りがあるてはなりません。悪を退け、善に親しみ” とあるからです。またイエス様は弟子たちに度々、“ あなたの隣人を愛しなさい。” (レビ記 19 章 18 節を引用されて)と言われました。では、“ 罪を憎み、罪人を愛しなさい。” の何が問題なのでしょう。

個人的には、この言葉がそのままの意味である限りは何も悪い事がないと思います。そこには、多くの知恵があります。これらの言葉に従って生きることは、そうする事により神様の教えを捨て去ることなく、私達が愛すべき人として行動する助けとなります。しかし、人々が時折り使うそれらの言葉のやり方が私達の信仰生活に誤解を誘い危険なことになり得ることがあるのです。

ですから私は今日そのことについてお話ししたいと思います。

それでは最初に “ 罪 ” について、そして、“ 罪人 ” について考えていきましょう。

聖書の記者達には罪について言うべきことが多くあります。神様の言葉によれば、罪とはどの位広い意味を持つものなのでしょう？ それは非常に広い概念です。ローマ 3 章 23 節でパウロは、“ 人は皆、罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっています。 ” と言っています。罪はどれ程の害を与えるものなのでしょう？ 聖書によれば、それは非常に大きな害を与えるものなのです。ローマ 6 章 23 節では、“ 罪の報酬は死です。 ” とあります。(結果、結論は死。) 私達はどれほど真剣に罪と向き合って戦わなければならないのでしょうか？ 非常に真剣にしなければなりません。ヤコブは聖書の中で(ヤコブ書 4 章 8～9 節)次のように言っています。

“ 神に近づきなさい。そうすれば神は近づいてくださいます。罪人たち、手を清めなさい。二心のある者たち心を清めなさい。嘆き、悲しみ、泣きなさい。あなた方の笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。”

本当ですか？ 本当にそうなのですか？ そんなに重大なことなのでしょう？ そうなのです。皆さんや私の人生において無視することのできないことです。もし、私達がこの問題の取り扱いに正しい行動を取ることを怠るなら、罪がもたらすであろうダメージの回復は見込めません。これは私の話しであり、皆さんの話しでもあるのです。

これはただ単に、“ 自分の成長の可能性を現実にするに失敗した。” また、“ 自分の決定を間

違えた。” というものではなく、私は間違っただけをする人。他の人にダメージを与える。私は倫理的に父親として、教師として、牧師として(この空欄に自分に当てはまることを入れて下さい。) 不適格だ。ということです。

私が北海道に来た時、雪について一つの言葉しか知りませんでした。そして、今まさに札幌に降り始めようとしている白いものを表現する多種多様な言葉があることを学びました。それらは、根雪、粉雪、牡丹雪、大雪等です。言語の中で何かと関連付けられる豊かで多様な言葉は、その言語が使われている生活の重要な部分の印(しるし)です。そうですね？ 聖書の中で使われる罪という言葉もそのようなものです。

それでは、聖書の中で罪として表現される時に使われる様々なイメージを通して、そのことを見ていきましょう。

罪を表す一つの言葉は、” 道から外れること “ です。道を間違えて行きたいと思ったこともない場所に結果的に行き着くことです。罪とはこのようなことです。罪に自分をしがみつかせると、自分の人生において結局ある状況に行き着くことになり、” どうしてこんなところに行き着いたのだろうか？” と考えることになります。

新約聖書の罪に対する大変一般的な言葉は、的を外すということです。聖書の書き手は、下手な(弓の)射手を表現する言葉として使っています。弓矢は射手が望まないところへ行ってしまうのです。射手が真っ直ぐに射ることができないなら、的の近くには立っていたくないでしょう。ミスショットした弓矢はダメージを与えますし、罪もそうなのです。自分の発言、行動、考えが自分が意図したこともない、目的としていないことになるのです。

罪について聖書が使う他の言葉は、壊れていることを意味します。それはもはや使えなくなった壊れた椅子やパソコンのようなものです。罪は人々にそのようにするのです。

また聖書の書き手が罪のことで使う他の言葉は、” 汚れ(染み、完全でないこと)” です。汚れのある動物を思い描いて下さい。もはや神様に捧げるには相応しくありません。

ティーンエイジャーであることの自然の法則の一つは、デートすることにワクワク、ウキウキするほどに、デートの日にニキビが大きくなるというのがありますが、罪はタイミングの悪いニキビより酷いことです。

200 あまりもの回数、聖書では、ゆがんだ、曲がった、ねじれた、ひずんだ、又は、同じ高さでない(公平でない)、といったことを意味する言葉を使っています。私の国で、私の成長期に起こった大きな事件の一つに、ウォーターゲート事件(スキャンダル)があります。大統領が弾劾され不名誉辞任したのです。ある時点で、彼が言った有名な言葉に“ 私はペテン師ではない(ゆがんだ、曲がったから、不正直、詐欺師の意味がある)。” というものがありますが、聖書では私達皆はゆがんでいることがあると言っています。

罪のその他の言葉は、「反逆」ということです。それは神様や物事が本来あるべき状態に対して公然と反すること、反逆することを意味します。それは 4 歳の小さな女の子が母親にこのように言った本当の話のようです。

“ この道路とあの道路の歩道が続いているところまでは自転車に乗って行っても良いけれど、それ以上は行ってはいけません。もし行ったら叩きますよ。” すると、その意思の強い 4 歳の女の子はお尻を突き出して言いました。” それじゃ、今叩いておいてよ。行かなくちゃならない場所があるから。” これが人間の心です。

聖書では何十回も、罪は借財を負うことと表現されています。神様に対する罪又は他人達に対する罪はいつも損失がでます。誰かを許すことはいつも何かを代価とするのです。

時に罪は、道を急に逸れる、道を間違っただけ進むと表現されます。それは、酔いすぎて歩けない、酔い

すぎて安全に車を運転できない人のようです。そのような人は誰かを傷つけるのです。きっとそうなります。

またある時には、罪は、罪を犯すことから不法なことと言われます。少なくとも罪を犯している間は、正しいこと、悪いことのルールや基準は私には当てはまらない、”私ではない。”と自分を信じるふりをしなければなりません。

このことに関連する罪の考え方に、不法侵入(人の敷地等に対する)ということがあります。私達は超えてはならない境界線を越えてしまいがちだからです。これらの境界は人々が平安に暮らすために設置されていますが、私達は時に行ってはいけない場所へ行ってしまう、同時に心の中でそうすることの理由を見つけようとしているか、少なくともそうすることの言い訳を自分の為を考えています。本当にそこへ行くべきではないのですが、そのような場合いつも、OKという理由を見つけることができるのです。

罪に対する最も重要な意味の一つに不道徳があります。イエス様は言われます。”心の清い者は幸いです。その人は神を見るでしょう。”(マタイ5章8節)

そうです「清い」という言葉は大変時代遅れに聞こえますし、今日では抑圧的でさえあります。実際それは、時には教会の中の人々によっても、抑圧的な方法で特に女性に対して使われて来ました。でも私達は、ほとんど考えることなしに「清さ」は私達の安全、幸福、満足のいく状態のため致命的に重要であると知っています。

私達の誰もが完全に清いということはないと私達は知っています。なので私達は、”どの位の量の罪ならば、心配し始める必要があるのだろうか？”と尋ねるかもしれません。クリスチャンにとって罪を許容するレベルなどはあるのでしょうか？それは海の中でプラスチックの含有量みたいなものなのでしょうか？ある一定のレベルを超えて高くなったら、本当の厄介ごとになるようなものなのでしょうか？それは少し、”自分の身体にできた癌細胞に対処するには、どの位の量まで増加させられるか”と聞くようなものです。

“食事に虫が少ししか入ってないから、それ位だったらOKだ。”とは考えないのです。

罪に関する問題は私達がただ単に他の誰かと問題になるというのではなく、罪の中心部分にそれ自体の罰があるということです。

では、私達はどの罪を憎むべきですか？勿論、全ての罪です。パウロが“悪を憎みなさい。”(ローマ書12章9節)という時、それは彼が同時に、”愛は正直で真実でなければなりません。”と言った後だということを思い出して下さい。彼は、読み手の皆さんや私の心の中心に愛について語っているのであって、他の誰かにではありません。パウロが悪である事を憎むという時、彼は、私達が誰かの生活における罪を憎むことを言っているのではなく、私自身の罪、私の冷酷さ、私の強欲さ、私の自己中心さ、私が真に愛する事から遠ざけるとんな事をも憎むように言っていることなのです。

イエス様がそのように言われていない(そのような言い方ではない)、“罪を憎む。”という格言には一つ問題があります。そして後半部分の“罪人を愛しなさい。”も同様です。こちらはイエス様が言われても良さそうなことに思えますね。イエス様は誰をも愛しておられます。また罪人の友と呼ばれていました。人々は嘲りを込めてそう呼びましたが、イエス様御自身は御一緒にいる人々を決して恥じてはいませんでした。罪人の友であり続けることによっていつもトラブルに巻き込まれていました。ある意味、そのことがイエス様を殺したとも言えます。イエス様は罪人とともに行動し、罪人を救うために来られました。パウロは、”ここに、あなた方が信頼できる格言があります。これは完全に受け入れるべきことですが、キリスト・イエスは罪人を救うためにこの世に来られました。”と言っています。イエス様はまるで罪人を惹きつける磁石のようです。”罪人を愛しなさい。”とは言われなかったが、”あなたの隣人を愛しなさい。”また“お互いに愛し合いなさい。”と言われました。でも実際に、”罪人を愛しなさい。”とは一言も言われてません。

どうしてでしょう？ 勿論一つには、“罪人を愛しなさい。”は、“あなたの隣人を愛しなさい。”という言葉に全て含まれているということです。あなたの隣人とはお隣に住んでいる人だけではなく、その対象はあなたが会える人誰でもです。ですから罪人は既に含まれていることになります。しかし私は、それ以上のことがあるように感じています。考えて見て下さい。もしイエス様が“罪人を愛しなさい。”と言われたのなら、弟子達はどのように行動したでしょう？ 多分彼らは罪人を探し出して、“罪人”、“良い人々”という世界に分け隔てることをしたと思うのです。そして勿論、良い人々のグループとは、正しい観念または正しい団体もしくは正しい宗教、正しい性的意識、正しい価値と言った、“

“私達”のような人々の集りを言うのです。私達のような宗教的な人にとっては、他の人達に対して勝ち誇って舞い上り、“ヘイ、来て私を見てよ。罪人達への愛を持っているよ！”というのは本当に簡単なこととなるのです。

CS ルイスの本、『キリスト教の精髓』(Mere Christianity 3巻、第4章、149、150頁)から数頁を読ん
でみたいと思います。

ここには他の人々を批判的な方法で(裁いて)見ることの問題点 についてのコメントがあります。

イエス様がいつも罪人と行動を共にしていたことは興味深いことです。しかし、イエス様は、“私はあなたを愛していますが、あなたの罪は憎んでいます。”とは言われません。

その代わりに、彼らに神様の慈悲、神様の恵、神様の容認そして神様のゆるしについて多く語っておられます。イエス様の態度はもっと、“私はあなたを愛している。ここに来て新しいスタートを始めよう。”というようなものと思います。

実際、福音書においてイエス様が罪に関して嫌悪を表した数少ない場所の一つは、今日の箇所、ルカによる福音書 18章のお話です。イエス様が憎んだ罪は、愛のない、裁く心で、それはイエス様が、自分達が霊的な専門家で霊的に成熟している(9節)と考えている者達と一緒にいる時、それがあらわになったのを見た時のことです。彼らは人々を愛さないで、自分達を罪人と考えていないという大きな罪により、罪に定められます。

彼らは罪人がその部屋の中にいるのなら、それは彼ら以外の誰かだと思っているのです。

これが今日のお話のエントリーポイント(導入点)です。これから残りの時間で素早くもう一度おさらいして行きましょう。

9章では、パリサイ人は“自分達は神様と共にあって正しいと確信している人々”であると言っています。他の翻訳(NKJV 新キングジェームズ訳)と(NRSV 新改訂スタンダード訳)では、彼らは“自分達が正しいと自分達に信頼を置いている”人々となっています。

多分、信仰生活の重要な問いは、誰を信頼するのかということです。神様に信頼するのですか？ 自分自身に信頼するのでしょうか？ 誰か他の人を信頼するのですか？

私達にとって、私達が正しく生活している、人々に忠実であると仮定することは、自分自身を本当に信頼している時には、非常に簡単なことです。

私達がこのような道に陥ってしまうと一つの特定の方向へ私達を導くことになり、それは他の人を裁くということです。新国際標準訳(NIRV)では、それを(9章)、“他の誰をも見下す。”としています。ギリシャ語のオリジナルで文字通りに言えば、イエス様はこの話を、“(他の人々)をなんにもないと考えている”人々に語ったとなります。

自分自身の正しさに信頼するとき、自分が行ったことの結果より以上に自分自身を引き上げていることとなります。もしも自分がハイレベルにいると考えるなら、それ故に、自分を他の人を蔑むよう誘導する強い傾向があります。それは時間がたつにつれて自己の信仰生活を破滅させ人間関係を災厄に導くのです。

11節では宗教専門家(パリサイ派)が立って祈るところです。立っていることは、イエス様の時代のユ

ダヤ文化では典型的な方法でした。ですが、“祈った”という言葉(prayed)は、ギリシャ語の文法では中動態(能動態と受動態でもなく、自分自身に動作が及ぶことを示す。)です。これは、この人がある意味、多分神様に語りかけている以上に、自分自身に語っていることを示唆しています。彼の感謝は、それが神様へ向けられている時でさえ(11~12 節)自分自身の美德のためであって、自分への神様の慈悲のためではありません。彼の祈りの中で最も多く使われた言葉があります。それが何かお分かりになりますか？

それは、「私」(“I”)という単語で 5 回です。取税人の祈りと比較すると取税人は「私」(“I”)は 1 回(NIRV 訳)で、「私に」(“me”)が 1 回です。

12 節では、(パリサイ派の)宗教専門家は自分の断食について解説しています。”年に一度の断食が法(旧約聖書の)で命じられているが、(レビ記 16 章 29 節、歴代史 29 章 7 節)このパリサイ人は加えて、過越の祭り(ユダヤ人の収穫祭)の間、仮庵の祭りと祭壇の奉献の間に週に 2 度、断食をしていると。”彼のレジメにはもう一つのことが加えられました。それに加えて収入の 10%を捧げていると。しかし神様は、この人の良い行いのリストに感銘を受けたのでしょうか？

13 節から始まる部分にその答えが分かります。礼拝する者は通常、目を閉じた顔を神様に向かって上げていました。しかしこの取税人の心は自分自身の罪のため打ち砕かれ、そのようには神様に向かって顔を向けることができません。彼の祈りは宗教専門家のように長いものではありません。その意味するところは、“神様、私を哀れんで下さい。私は罪人です。”というものです。多くの翻訳は“a sinner(罪人)”としています。ここで、この名詞(sinner)の前に付けるには明確な冠詞があり、より字句に拘るのであれば、彼は自分を、“the sinner(罪人)”と呼びましたとなります。(日本語の場合冠詞がないので、あえて表現するなら、「私が罪人です。」で a sinner が「私は罪人です。」)

そして自分の胸を叩いて悔恨を示します。これは十字架に架けられ死なれたイエス様を見た者達が行ったことであるとルカは私達に言っているのです。

この単純ながらも心のこもった祈りは、クリスチャンにこの時から何世紀にも渡って国々を超えて祈られてきた有名な祈りの起源となり、それは、“イエスの祈り”と呼ばれています。それによって私達は祈ります。”神の御子、主なるイエスキリスト様。罪人である私を哀れんで下さい。”それでおしまい。それだけです。短くて単純なものです。でも、私達が心の底から神様にそう祈るなら、それは私達の人生そのものを方向変換させることになるでしょう。

このパリサイ人は他の人達を罪人と考えています。取税人は自分の罪に注目し、神様から良しとされました。他の人達を裁くことは全く心にはありません。なのでイエス様によれば、彼のシンプルな助けを求める要望が神様の御心を動かし、彼を神様に従う者の良いモデルとしました。ギリシャ語のオリジナルでは、イエス様は、“この人”は神に義とされて立ち去った。”となっており、宗教専門家は彼を“この取税人”と呼びました。

この違いがお分かりになりますでしょうか？ ここには私達が見逃すことのできない重要な点があります。神様は、彼を社会から疎外されている者ではなく、許しと新しい出発が必要で神様の愛が届かない者ではない、ほかの誰とでも同じ一人の人として受け入れているのです。

何が平和の内に人々を結びつけることができるのでしょうか？ 何が、様々なことで分断されているこの世界の人々をまとめることができる力を持っているのでしょうか？

ここに重要なヒントがあります。イエス様の言葉は私達が持つ共通の人間性が私達の罪の現実を含んでいると示唆しています。私達は皆、清くされ、許され、新しくされ、作り直される必要があります。ですが私達の罪のためには慈悲もあるのです。これが私達をより一層結びつけるのです。神様の恵みと哀れみは、私達がそれらを必要であると理解して信仰によって求め、神様のそれらの愛の力によって生活の上で実践し始める時、同様に行動する他の人々との連帯によって、全ての人を一つにすることが

できます。これが私達がここに祝福のために毎週集っている、良い知らせです。(私達がこれを忘れて、これによって生きることを怠る時、神様や他の人と平安に生活する基礎から離れることになりません。)

取税人は宮を、” 神様から受け入れられて” 出ていきます。と 14 節にあります。

その他の翻訳(例えば NKJV, NRSV) では、彼は” 正しい者とされた。” とあります。

私達はこれを、神様の許しが私を、” まるで罪を犯したことの無い” ようにされたと考えることができます。メッセージ版の訳では、これを、” 神様と共にある正しさ。” と言い、そして続けて、” 偉そうに歩いていると、結局失敗する。” と言っています。

14 章では彼の話を結論付けて、イエス様は自分自身を持ち上げる人々と引き下ろす人々について語っておられます。イエス様はあたかもプライドの塊のような人と謙遜な人とを比較しているように思えます。そしてルカが引き続きイエス様が意味することを例としてこの二つの話とともにこれらの言葉を後報したようです。最初のは、祝福されるためにイエス様の前に連れてこられた子供達についてのもの(15 ~ 17 節)です。当時の社会では子供達は明白に謙遜で偉ぶらない地位にいます。しかしイエス様にとっては他の人々と同様に重要なのです。彼らは祝福されて家に帰りました。そして豊かな統治者がイエス様のところに来る話があります。彼は自分自身を、子供の時から神様の命令ずっと守ってきた本当に良い人間であると理解しています。このプライドがイエス様の言葉を受けることを妨げ、” 引き下げられて” 祝福されることなく彼は家に帰りました。

さてイエス様が話された宮における 2 人の男の祈りの話も一周して元に戻り終わりになります。この話を聞いた群衆がショックを受けたのは、打ちひしがれ、愛情に飢え、屈辱的な罪深い取税人がヒーローとなったことです。キリストのメッセージの主題もここににあります。私達は他の人々を裁くと断言する権利はありません。何故なら、その人の全容を知らないからです。しかし、私達が自分達の罪に正直に向き合う時、神様の変ることのない愛の力によって生きることを学び始めることができます。

これが今日のメッセージです。もし私達がこのことを真に受け取るなら、私が思うただ一つの適切な応答は祈りで神様の御元へ行くことです。

神の御子、主なるイエスキリスト様、罪人である私を哀れんで下さい。私自身の罪、とりわけあなたが私達を愛されたその愛で、あなたや他の人々を愛することをしない罪から私達を自由にして下さい。ここに、また全ての場所にいる兄弟姉妹と共に、あなたの哀れみ、あなたの恵み、変ることのないあなたの愛による活力で生きることができるよう私を自由にして下さい。そのことを通して、今日、ここからあなたの右の坐に行くことができますように助けて下さい。そしてそのことを通して、他の人々に対して、裁き、非難する態度を取ることから私達を自由にして下さい。そして、私達皆がお互いに平和に暮らすことができる世界を作り上げようとしているあなたや他の人々に私達もまた加えて下さるよう導いて下さい。キリストのお名前によって祈ります。アーメン。

参考

Lewis, C. S. (1996). *Mere Christianity*. New York: Touchstone.

ルイス、C. S. (1981 年). 『キリスト教の精髓』. ルイス宗教著作集 4. 柳生直行 (訳). 東京: 新教出版社. Ortberg, J. (June 30, 2019). *Love the Sinner, Hate the Sin. I Didn't Say That*. Menlo Church. Palo Alto, California. Retrieved November 10, 2019 from

<https://menlo.church/messages#/modal/message/5311/mlo>

Robertson, A. T. (1960). *Robertson's Word Pictures of the New Testament*. Rev. ed. Broadman Press. Retrieved November 7, 2019 from <https://www.biblestudytools.com/commentaries/robertsons-word-pictures/luke/luke-18-9.html>